来日日系ブラジル人子弟の教育とアイデンティティ

出稼ぎ現象の中の子どもたち

The Identity and Education of Nikkei-Brazilian Children in Japan

- The case of children Inside the Labor Migration -

コガ、エウニセ A. イシカワ

Eunice A. Ishikawa KOGA

The objective of this paper is to expose the situation of children who are brought to Japan from Brazil by their parents. The analysis is focused on educational factors and the formation of an ethnic identity (Nikkei-Brazilian) among these children, who are involuntarily included in an international labor migration. Of particular note here, is the fact that the parents are short-term foreign labor in Japan, a situation which has a strong influence in the decline of: the level of education for these children, and confidence in their identity leading to a lack of stability within the school and social environments of either country of habitation.

1. はじめに — 国際労働力移動のなかでみた子ども

本稿では、国際労働力移動において、子どもたちがおかれている現状に注目し、労働者の受け入れ側と送り出し側における子どもに対する教育の実態および両者の相互関係を明確にすることを目的とする。そのために、分析では来日している日系ブラジル人子弟の事例を取り上げ、この子どもたちが直面する教育の現場の問題と異文化のなかで形成される彼らのエスニック・アイデンティティに焦点をあてる。

日本では近年日系ブラジル人労働者に連れられて来日した、または日本で生まれた日系人子弟が増加している。現在、在日日系ブラジル人は約20万人¹⁾（法務局入国管理登録課、1996/12）であり、その内約3割が静岡県と愛知県に在住している。日系人子弟の数は静岡県浜松市の場合、同市に在住するブラジル国籍者数8136人中16才未満が1251人（15%）である（静岡県浜松市役所資料、1997/3）。また群馬県大泉町に在住するブラジル国籍者は3981人であり、そのうち同市の小・中学校に在籍しているブラジル国籍子弟は240人（6%）である（群馬県大泉町役場資料、1998/2）。これらのデータから見ても、来日している日系人の内の約10%は学齢期の子弟であることが考えられる。本稿ではこの子どもたちが日本で直面する言葉や習慣の違いの問題を取り上げる一方、彼らがブラジルへ帰国したとき、どのようにブラジルの社会に再適応できるのかを考察する。

来日している日系人子弟の多くは日本の学校（主に小・中学校）に通っており、日本人

子弟と共に勉強しているケースが増加している。しかし、言葉の問題をはじめ、習慣の違いや学校の規則の違いに戸惑う日系人子弟と、受け入れ側の学校で問題が多く見られる。そのため、外国人子弟を受けれている学校側では、日本語教育をはじめ、日本の習慣や、母国語教育（この場合はポルトガル語）などの指導をしており、特別なクラスを設けたり、担任の先生が個人的に指導を行っているところもある（太田 1995:34）。また、学校内のみでなく、日系人子弟の親との連絡などに関しても、連絡通知書などをポルトガル語に翻訳したり、漢字にふりがなをふったり、または家庭訪問をして説明をする配慮を取っていることが多くみられる。

しかしながら、日系人子弟は実際に日本の学校や日本の社会に適応しているとは言い難い。彼らは学校でのいじめや日本人の友だちができないといった問題に直面しており、登校拒否になるケースも少なくない。また、日系人子弟が置かれている状況は、親が出稼ぎという形で来日している現状と直接関係していることはいまでもない。つまり、親は2、3年という短期的滞在の目的で来日し、その間にできるだけお金を稼いでブラジルに帰国するという目的を持っているケースが多く（日本統計研究所、1993/コガ、1995）、そのため一緒に来日した子どもたちも一時的に日本の学校に通うという安易な考えを持つ親が多いのである。逆に、子どもの教育のために出稼ぎ者として日本で働いていると主張する親もいる。子どもをブラジルで良い学校に通わせたいという考えがある一方、他方では日本の教育水準はブラジルより高いので是非自分の子どもに日本の教育を受けさせたいという意見もある。しかし、来日した日系人子弟が日本及びブラジルでおかれている現状は、必ずしも親が考えている通りになるとはいえない。

2. 日系ブラジル人のアイデンティティの変容

成人日系人の場合、ブラジルー日本間を移動し、それぞれの社会で生活をするときに、そのおかれた環境、言葉、習慣、仕事内容の違いなど、直面する様々な障害を乗り越えなければならない。そうしたなかで日系ブラジル人としてのアイデンティティの再形成（再評価）が見て取れる。

日系人子弟を分析した際、成人のアイデンティティの変容と比較すると、子弟の方がブラジルに対する帰属意識が形成されていない段階で来日していることによって、短い期間でのアイデンティティの変容がみられるのではないだろうか。子供の方が言語を習熟する時間が短く、日本の習慣に適応するのも容易である。しかしながら、彼らは日本の学校に通う一方で家庭においてはブラジルの言葉や習慣が維持されている環境にある。本稿では子どもたちに見られる社会的・文化的要素を分析し、それらが日本での生活にどのように作用しているかを考察する。ここで＜文化＞を考えると、文化資本及びその構成要素としてのハビトゥス²⁾（P. Bourdieu）の概念を援用し分析をする。つまり、特定の環境及び一定の場において、その環境内の諸条件の下で、習得される人々の行動性向、また意識的及び無意識的に信じることや日常生活において当たり前と感じる・考えることに作用しているものがハビトゥスである。それぞれのハビトゥスは所与の場や課題との関連で、一定の資源性、資本性をおびてくる。一人一人の資源を総合的にみる場合、ある特定の環境（民族、階層、家族など）における文化資本が抽出できる（Bourdieu & Passeron, 1970）。

なお、ハビトゥスは時間とともに変容する。近代化による交通・通信の普及をはじめ、生活環境の変化の中で、よく起こることとして親子の意見の違いによる家族問題、いわゆる世代の違いによる考え方のズレの例があげられる。この親子が属している階層という視野から分析すれば、彼らは同じ枠組みに入れられるが、一方、その枠組みの中で、世代によるハビトゥスの差異化があったことは確かである。

来日する日系人を特徴づけるアイデンティティの構造要素のうちに親や祖父母から伝達された伝統的な誇りや名誉に関わる価値が認められ、そしてそれらに基礎づけられた日本イメージと行動性向が少なからぬ役割を演じていることである（コガ、1997:2）。

日系ブラジル人における文化資本とは、ブラジルへの日本移民の子孫が、ブラジルの中で「日本人」として育てられ、身体化された「日本人」としての考え、行動性向を身につけ、これを資源としうる可能性を指す。その文化資本の特徴としてあげられるのは、ブラジルにおける日系人社会の中で日系人が「真面目」、「勤勉」、「正直」という美化されたイメージの「日本」文化を教えられ、それをシンボルとして築き上げられたアイデンティティや行動性向である（コガ、1996：155）。

しかし、日系ブラジル人が日本へ来ることにより、今まで自分たちがアイデンティファイしていた「日本」・「日本人」と現実の日本及び日本人とが切り離されて存在するということを認識する。彼らの多くが体験するのは、来日するまで自分たちが抱いていた「日本」のイメージ、つまり「真面目」・「勤勉」などポジティブなものであったものが、日本で出会った日本人により、「冷たい」、「差別する」、「粗野」と言うネガティブなものに変わっていく。ここで言う「粗野」とは、建設現場などで見られる日本人の人扱いや言葉遣いが、日系人から見れば粗野に感じるところから来るイメージである（JICA, 1992）。筆者の以前の調査でも、ブラジルへ帰国した多くの日系人から同じような発言が得られた。彼らは、自分たちと日本人とを区別をしており、自分たちが知っている日本人は日本における労働者階級に属する人々であるという発言であった。例えば、「自分たちは、ブラジルの労働者ではなく、高学歴者であり、いずれは自営業を営む人々である」という発言が挙げられる（コガ1997：156）。彼らは、現在一時的に将来の夢のため、日本で非熟練労働者として働いているのであると主張している。彼らはブラジルにいるときは、自分たちとは違う非日系人を対概念にしたそれまでの「日本人」というのれん³⁾に代えて、今度は現実に経験した日本人を一般化し、対概念にして、自分たちは「ブラジル人」（非日系人を含む）及び「日系ブラジル人」とであると強調するようになる（コガ、1995：44）。

しかし、日系ブラジル人子弟の場合は、成人の日系人と同じように「日系人」としてのアイデンティティを持っているとは言い難い。日系人子弟の場合は、ブラジルで生まれ、成人になるまでブラジル社会で育った日系二世・三世である親たちが「日系人」または「ブラジル人」としてアイデンティファイする対象とは異なる。つまり、日系人子弟の方が現在の日本の社会との接触がある反面、ブラジルの社会との間接的（親や家族を通して）な繋がりしかない現状があげられる。日系人成人の場合、ブラジルにおいて日系人としてのアイデンティティを形成するための文化資本としての家族、家庭内教育、婚姻関係、言語（日本語）、食文化、日系人会、身体的特徴などは、ブラジルの社会ではそれぞれ日本の文化に対応していた（コガ、1996a）。しかし、日本の社会の日系人子弟の場合、上記の7つに代表されるファクターが今度はブラジルの文化を反映することになる。いわゆる、彼

らの家庭内教育、言語（ポルトガル語）、食文化などはブラジルの文化として認識されるのである。身体的特徴に関しては、日本における日系人子弟は日本人子弟と全く変わりがない場合（両親とも日系人）と、そうでない場合（片方の親が非日系人）がある。そこで、彼らの日本での滞在が長期化するにつれて、身体的特徴とアイデンティティとの関係の分析が今後必要と思われる。

3. 来日している日系人子弟の実態

日本での出稼ぎ者の実態及び帰国後に彼らが直面する様々な問題については別なところで（コガ、1997a）報告したが、ここでは子どもたちの実態に関する報告・議論をする。

来日日系人子弟は、日系ブラジル人出稼ぎ者に連れられて来日しており、日本の保育園に入園したり、学齢期になれば日本の小・中学校に通うようになる。また、日本の学校には通わず、ブラジルの通信教育を受けている子弟もいる。ここでいうブラジルの通信教育とは、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロ市に本校をおくアングロ・アメリカノ私立学校が外国にいるブラジル人子弟のために行っている教育制度である。ここで注意すべき点は、事実上通信の形であるが、在籍証明書及び卒業証明書はリオ・デ・ジャネイロにある本校の学生として証明されることである。つまり、書類上はブラジルの学校に在籍していることになるので、ブラジル国内における転校や進学には問題がないことである。なお、この通信教育はブラジル教育省の制度ではなく、上記の私立学校がブラジル教育省から特別な許可を受けているものである。現在、この通信教育を受けている日系ブラジル人子弟は約150名である⁴⁾。

本稿で取り上げる調査は直接面接の方法を取り、日本国内で行った調査とブラジル国内で行った調査の二つから成るが、日本での調査は静岡県浜松市及び愛知県豊橋市にて37名の日系人子弟を対象に直接面接を日本語及びポルトガル語で行った（1997年4月）。ブラジル側での調査は、マットクロッソ州クイアバ市及びパラナ州ロンドリーナ市にて日本から帰国した日系人12名を対象に直接面接を主にポルトガル語で行った（1997年10月）。

日本側で行った調査対象者のうち、31名は日本の学校に通っておらず、ブラジルの通信教育のみを受けており、1名は同時に日本の学校にも通っている。そして6名は日本の学校のみに通っている。年齢別では7才から15才（平均年齢10才）であり、男女別では男性が24名、女性が13名であった。

本調査では日本の学校に通っていない子弟の方が31名で大多数を占めているが、来日している日系人子弟の場合、ほとんどが日本の学校に通っている。ただ、本稿では日本の学校に通っている子弟とブラジルの通信教育のみを受けている子弟を比較して、彼らのアイデンティティにどのような違いがあるのかを見ていきたいために上記のような子どもたちの焦点をあわせた。

表- 1. 調査対象の来日日系人子弟の年齢

年齢	7	8	9	10	11	12	13	14	15	合計
女性	3	3	1	2	1	1	2			13人
男性	4	2	2	5	2	2	2	3	2	24人

(調査地域：浜松市・豊橋市 調査時期：97年4月)

表-2. 調査対象の来日日系人子弟の来日時の年齢

来日年齢	8歳以下	9—10	11歳以上	合計
女性	10	2	1	13人
男性	12	6	6	24人

(調査地域：浜松市・豊橋市 調査時期：97年4月)

表- 3. 調査対象のブラジルへ帰国した日系人子弟

名前	性別	年齢	滞在年齢	日・滞在	場所	通学歴	ブ・学年
A	F	15	9～14	5	広島	小3～中1	7年
B	M	12	7～10	3	兵庫県	小1～小3	6年
C	F	13	7～12	5	名古屋	小1～小5	6年
D	F	14	7～13	6	群馬県	小3～中1	6年
E	M	11	4～10	6	群馬県	小1～小3	4年
F	F	12	7～9	1.5	藤沢市	小2	3年
G	F	11	8～10	1.5	東京	小2	4年
H	F	11	6～8	1.5	藤沢市	小1	5年
I	M	14	9～11	1.5	藤沢市	小3	6年
J	F	15	7～14	7	名古屋	小1～小6	6年
K	M	19	15～19	4	北海道	——	高1(夜間)
L	M	23	16～21	5	栃木県	——	高1(夜間)

(調査地域：クイアバ市、ロンドリーナ市 調査時期：97年10月)

(1) ブラジルの通信教育を受けている日系人子弟

ブラジルの通信教育を受けている子弟はブラジルの学校から送られてくる教材を使用してポルトガル語で勉強をしている。本来は個々人が家で独学する方法が主であるが、静岡県浜松市では、1997年12月までアングロ・アメリカノ私立学校の通信教育センターが設けられており、そこで補習的な授業を受けていた生徒が約50名であった。しかし、1998年に日本でのセンターが無くなり、生徒は個人的に直接リオ・デ・ジャネイロのアングロ・アメリカノ私立学校から教材を取り寄せ、独学で勉強をしなければならない状態になった。この教育のシステムでは、特に小学校低学年の子どもの勉強に問題があるのではないかという疑問があった。つまり、小学校の低学年ではポルトガル語の能力が低い段階で、通常の学年の全科目を独学で勉強をするのは困難であるということである。また、家で親がどの程度子どもの勉強の面倒を見ているかという問題がある。

日本の学校に通っていないということで、彼らの日常会話は全てポルトガル語である。中には日本の学校に通った経験及び通っている子弟もいるが、本学校では全てポルトガル語で授業を行っていた。しかし、来日したときの年齢により、彼らのポルトガル語の能力

はまちまちであった。いわゆる、文法的に正しいポルトガル語を話せない子が多い。今回得られた小学校一年生から4年生（ブラジルの教育システムは小学校が4年、中学校が4年、そして高校が3年である）のクラスを担当していた先生の証言によると、「小さいときに日本に連れてこられた子どもはポルトガル語が話せるとはいえ、知っている単語数が少なく、彼らのポルトガル語の理解力が低いため、通常の教科を教えるのが困難である」と語っていた。

一方、中学生以上の場合には言葉の問題はなく、本人が独学で毎月のノルマを果たせるかどうかの個人的な問題になる。しかし、来日して何年かは日本の学校に通ってからブラジルの通信教育に「転校」してきた学生については、第一の問題はポルトガル語の再教育をし、そのあと本人の相当する学年に編入できるかを判断する仕組みになっており、もし編入できないという判断が下されれば、もう一年ポルトガル語の再教育を受けることになる。例えば一つの事例であるが、Cくんは9才の時来日した。ブラジルでは小学校2年生まで通い、日本では小学校3年生から6年生まで通った。彼は、日本の学校にはなじめず、中学校には進まないで、ブラジルの通信教育に受講してきた。しかし、現在14才で、本来はブラジルの中学校3年生に編入すべきであったが、それに相当するポルトガル語の能力が低いため、現在ポルトガル語の再教育を受けている。また家庭では、彼らはポルトガル語で話しており、食事も主にブラジルの食べ物である。彼らは日本人の友達ほとんどいなく、日本に住んでいても、ブラジルでの生活とほとんど変わらない状態である。ただ、日本のテレビでマンガを見る子が多く、彼らの知らない内に日本語の言葉をマスターしているケースも見られた。

しかしながら、この日系人子弟は言葉がポルトガル語であって食生活がブラジル食であっても、彼らの多くがもっているブラジルの知識は親たちの話で聞くブラジルであり、中にはブラジルの記憶さえない子もいた。例えば、小学生の低学年（1・2年生）にどこに住んでいたのかと聞いても、「知らない」と答える子が多かった。

（2）日本の学校に通っている日系人子弟

本調査において日本の学校に通う日系人子弟は6名であり、事例として少なかったが、彼らは来日日系人子弟の平均像をあらわしている（太田、1996：123）。

まず、日本の学校のみに通う日系人子弟に共通するのは、日本語の流暢さ（少なくとも話し言葉）、そしてポルトガル語の不自由さである。例えば、Mさん（女性、13才）の場合は、7才で来日し、小学校1年生から日本の学校に通い、現在中学1年生である。彼女の日本語は、会話にはほとんど支障がない。しかし、彼女のポルトガル語の方は、発音も日本語なまりであり、読むことはほとんどできなかった。

また家庭では、両親はお互いにポルトガル語で話し、子どもにもポルトガル語で話しかける。しかし、Mさんの方はほとんど日本語で答える。

また、Nくん（男性、10才）とGくん（男性、9さい）は兄弟同士で、二人とも小学校一年生から日本の学校に通っている。彼らの場合にも、Mさんと同様に親がポルトガル語で話しかけても日本語で答えることが多い。インタビューで彼らにポルトガル語で質問をしても片言なポルトガル語で答えるが、日本語で質問をすると流暢な日本語で答が返ってくる。

Naさん（女性、7才）の場合は日本へ来てまだ一年であるが、日本の学校に通いはじめ、話す言葉は勿論、読み書きもポルトガル語より日本語の方ができるようになっている。しかし、両親は、二人ともブラジルでは大学を卒業しているにもかかわらず、娘の勉強を何も手伝うことができない。このような現象は諸外国、例えばフランスにおける外国人子弟の教育にも見られる。フランスの移民の子どもの「おちこぼれ」の背景として、親の教育水準及びフランス語の能力が、子どもの教育に影響を与えているとの指摘もある（辻山、1996：91）。また、同じくフランスの例で、移民の子どもの教育と親の出身地域が関連しているという分析がある。ここでは、農村地域出身者が多いアルジェリア人やモロッコ人がもともと教育に関心を持たなかったのに対して、都市部の出身者が多い東南アジア系移民としてのベトナム人やカンボジア人の方が教育に価値をおく傾向があると指摘されている（宮島、1997:21）。

しかし、日系ブラジル人に関しては、ほとんどがブラジルの都市部出身者であり、ブラジルでは教育にかなり熱心であったにもかかわらず、少なくとも現時点では日本における日系人子弟の教育に関しては問題点が多いと言わざるを得ない。それは、親たちの日本語能力の低さと関係があるいえよう。

これらの事例からわかるのは、日本の学校に通う日系人子弟は、話し言葉としての日本語は比較的早く身につけることができるにもかかわらず、学校での教科についていくことができる日系人子弟の例はまだ稀であるということである（太田、1996：130）。実際、小学校の先生や教育委員会から派遣される日本語・ポルトガル語の先生に話を聞くと、日系人子弟の場合はいずれブラジルに帰る子が多いということで、日本にいる間は学校生活に問題がない程度の日本語や日本の習慣を身につけるのが精一杯だという意見が多い。

また日本の学校に通う日系人子弟は、ブラジルの通信教育のみを受けている子弟と比較すると、第一に日本人の友達が多く、学校の外でも日本人の友達と遊ぶ傾向が強い。例えば、Mさんの場合は、友達がよく家に遊びに来て、時には泊まっていくことがある。しかし、今度はこの子たちと親とのコミュニケーションや習慣の違いから生じる問題もでてくる。例えば、遠足に持っていく弁当一つにしても、ブラジル人である親は日本人の母親が作るいわゆる「日本的」な弁当を作ることができない（少なくとも最初は）。つまり、ブラジル人の親が作る弁当は弁当箱の詰め方や材料の色合いの組み合わせなどに気を配らない（本来ブラジルでは弁当といえば、サンドイッチや丸ごとのフルーツをイメージする）。それに対して、子供は学校で自分の弁当を開けるのも恥ずかしいと言い、親に対して不満を抱く。

4. 日本から帰国した日系ブラジル人子弟の実態

ブラジルの学校において、基本的に外国で受けた教育が書類上正式なものであれば帰国したブラジル人子弟及び外国人子弟の入学・編入に関しては問題がない。正式な書類とは外国において受けた教育証明書が、その国におけるブラジル大使館で認証されたものであるということである。つまり、日本からブラジルに帰国する子弟は、日本の学校で勉強した期間の証明書をブラジルの大使館で認証してもらい、ブラジルの学校に本人が相当する学年に編入することができる。

しかし、ブラジルの学校に編入するときには、子供たちのポルトガル語の能力及び編入する学年に相当する学力が要求される。そのため、原則としてブラジルで受けていない教育の部分は遡って試験を受けなければならない。例えば、日本で小学校1年生から3年生まで勉強をしてからブラジルに帰国し、ブラジルの学校で小学校4年生に編入した場合、4年生のクラスで勉強をすると同時に、教育委員会が必要と判断した小学校1年生から3年生の科目の試験を同時に受けなければならない。この結果を市の教育委員会に報告をすることになっている。

また、ブラジルの教育では小学校一年生から落第制度がある。従って、外国から帰国した子供が編入した学年についていけない問題が生じ、その学年を落第することがあっても、あくまでも本人の問題として扱われる。例えば、上記の例で小学校1年生から3年生まで日本で勉強した子供の場合は、ポルトガル語の識字教育を受けていない可能性が高い。この場合、書類上は小学校4年生に編入することが可能であるが、事実上学校に受け入れられない。または受け入れられても、個人的にポルトガル語の識字教育を受けない限り落第をすることになる。学校側では、この場合、子弟の識字教育はあくまでも親の責任であることを主張している。

ブラジル側での調査対象者のうち2名は私立学校に通っており、後10名は公立学校に通っていた。平均年齢は14才であった。ここで、19才と23才の二人を除く平均年齢は12才である。この2名に関しては、ブラジルの中学校を卒業後来日し、4、5年の滞在中は仕事のみをしており、ブラジルへ帰国してから高校に入学したケースである。彼らの特徴としては、高校に入学するのが一般の学生より遅れているという程度で、ポルトガル語の能力の問題などはほとんどない。また、上述の通りブラジルでは小学校一年生から落第生であるため、学年と年齢が必ずしも関係している訳ではない。よって、学校では彼らはまったく問題がないという判断が下される。ちなみに、ブラジルの学校では基本的に3交代制をとっており、中学校から成人向けの夜間の部が設けられている学校が多い。

調査対象の帰国子弟のなかでは日本で小学校1年から勉強した子弟に問題が多く見られた。まずポルトガル語の能力があげられる。つまり、ポルトガル語の識字教育を受けないまま、日本の学校で勉強をしてブラジルに帰国したケースである。インタビューはポルトガル語で行ったが、彼らのポルトガル語には文法的な間違いや発音の問題があり、いわゆる日本語なまりのポルトガル語を話していた。

一方、ブラジルで小学校1、2年生を勉強した後來日したケースでは、ブラジルの学校で問題があったとしても他の学生より成績が低いという程度であった。しかし、1、2年すると他の学生とはまったく違いが見られない、またはそれ以上に成績がいいというケースも見られた。

このようなケースは日本における外国人子弟の教育にも同じような傾向が見られる。つまり来日時に母語による識字能力がある場合に、日本語を会話のみではなく学習思考言語として習得する傾向が高く（太田、1996：135）、まだ少ないとはいえ日本人の学生のレベルまで達するケースもある。

5. 日系人子弟のアイデンティティ

(1) 日本における日系人子弟のアイデンティティ

日本における日系人子弟のアイデンティティ形成に見られる特徴は、ブラジルの通信教育を受けている子弟と日本の学校に通う子弟の間で顕著な差が見られる。前者は日本に住んでいても、ポルトガル語による勉強やブラジルの（言葉、食事など）な家庭環境にあることで、自分がブラジル人であることに疑問を持つ子はいなかった。なかには、来日した年齢が低く、ブラジルの記憶さえない子もいたが、家庭の中で教えられるブラジルの習慣やブラジルの文化を享受していた。

一方、後者は日本の学校に通う子弟であるため、日本語をはじめ日本の習慣を身につけており、なかにはなぜ自分は「ブラジル人」であるかを理解できない子もいる。特に日本の学校に通う1・2年生の小学生に、日本人の子どもと同じような遊びをし、同じような食べ物の嗜好があり、ブラジル人であるという意識が薄くなっていたといえる。しかし、小学校3・4年生及び中学校に通う日系人子弟には日本の学校や日本人に対するネガティブな意見が多かった。

(2) ブラジルに帰国した日系人子弟のアイデンティティ

ブラジルに帰国した日系人子弟の教育には表面的に問題がないといえるが、日本からブラジルに戻った子弟の間では、ポルトガル語の発音が変である、また落第をしたということで悩む子が少なくない。日系ブラジル人のエスニック・アイデンティティに関しては、ブラジルにおいて日系人社会及び日系人家族で受け継がれている日本の文化を元にしたイメージが核になっている。つまり「真面目」、「正直」、「勤勉」である。しかし、日本から帰国した日系人子弟は少なくとも帰国直後は、ポルトガル語が堪能ではなく、ましてや落第をする場合には、この「勤勉」というイメージがくずれることもある。また、他の学生から見れば、日本から帰国した日系人子弟がポルトガル語ができない、またはおかしい場合には成績が悪い「日本人」になるのである。この特徴は、日本人移民がブラジルへ移住した当時の状態と類似している。例えば、ブラジルにおける日本移民はポルトガル語ができず、日本人会、県人会、農業組合などをつくり集団で生活をする傾向があり、現在においても日本移民の子孫である日系2世・3世を主とする日系人社会の凝集性がみられ、存続している（コガ、1997b: 6）。しかし、現在の日系人の場合はポルトガル語やブラジルの習慣などに関して他のブラジル人と比較して欠落しているという理由などから日系人同士の凝集力を維持しているというより、自分たちの「日本人」としてプライドを維持している側面が強い。

しかしながら、1990年以降日本への出稼ぎ現象に伴い、日本に連れてこられた日系人子弟の場合は、ブラジルで教育を受けた日系人成人と比較した場合、一時的な現象ともいえるが、彼らはポルトガル語の能力をはじめ、勉学に関するレベルが低いと言わざるを得ない。来日している日系ブラジル人の学歴を見てみると、約4分の1はブラジルでは大学入学以上の学歴を有していた（山中・コガ、1996/日本統計研究所、1993）。それと比較すれば、上記の日系人子弟はブラジル及び日本の大学に入学する可能性は低くなりつつあるといえよう。

また、ブラジルでの生活について聞くと、日本の方がいいと答える子も少なくない。その理由は、例えば、Aさん(女性、15才)の場合は「ブラジルで生活する方が難しい。ブラジルでは勉強をしなければいけないし、職業を持たなければならない。日本の場合は勉強する必要がない。日本では誰でも働けるしお金を稼ぐことができる。私は日系人であって良かったと思う。自分は日本に働きに行けるけど、‘ブラジル人’はできない」という。ここで彼女がいう‘ブラジル人’とは非日系人を指している。なお、Aさんは、家族の都合で中学校を中退してまた来日することになっており、今度は15歳以上であることもあって日本では仕事をすると言うことであった。

日系人子弟の場合、日系人としてのアイデンティティとは、日本の文化及びブラジル社会で於かれている文化的側面より、出稼ぎ者として日本へ来ることができる一つの特権としてとらえている傾向が強くなっているといえる。つまり、日系人であることは日本で働けるという意味になっている。

6. おわりに

以上、教育水準という観点から見れば、来日している日系ブラジル人子弟の学力は低下していると言わざるを得ない。彼らは、日本の学校では日本語をマスターすることや、日本の習慣などを身につけることが比較的簡単にできても、日本の教育システムのなかで必要とする学力を身につけていることは希である。つまり、中学校を卒業した後、高校への受験可能な学力を持っている日系人子弟は少ない。また、短期的に出稼ぎ者として日本に滞在をしているという意識を持っている彼らのなかでは、日本で高校へ進むより、2、3年でも仕事をすれば、それだけお金を稼ぐことができ、将来ブラジルへ帰国したときのためになるという考えが強くあるため、中学校卒業後、親と同じ仕事に就くことが多い。

一方、日本から帰国してブラジルでの教育システムに戻ろうとしても、日本で滞在した期間は彼らの学力にかなりのマイナスな影響を与えており、ブラジルでの学校復帰で彼らは大きな負担を背負うことになる。小学校低学年(小1・小2)でブラジルへ帰国する場合が学校復帰に一番難しいケースである。しかし、前述の通り、ブラジルの教育システムは小学校一年生から落第制であるため、日本と比較すれば、年齢と学年とは必ずしも直接関係していないので、日本からブラジルへ帰国して、本人の年齢からすれば本来の学年より1、2年遅れることがあっても、ブラジルの教育システムに対応する可能性は充分ある。

日本の教育システムにしろ、ブラジルの教育システムにしろ、日系人子弟が抱える問題は両方のシステムに十分適応していないことである。いわゆる、親と共にブラジルと日本を行き来している間、日本とブラジルの教育が両方とも中途半端になる可能性が高くなる。また、日系人子弟が自らを出稼ぎ者として意識するようになることも彼らを教育の現場から遠ざける原因である。

1990年以降のブラジルから日本への出稼ぎブームが起こる以前までは、ブラジルの日系人社会では子どもの教育への熱意が高いことがブラジルで知られていた。しかし、現在では日系人社会では日本への出稼ぎ意識が根づいており、日系人の若者や子どもの教育への意欲は弱くなっているといえよう。また、親たちも出稼ぎ現象に巻き込まれており、出稼ぎが彼らの生活手段となっている現状も否定できない。結果として、出稼ぎ者として来日

するために大学や高校を中退する日系人の若者や、親に連れられて日本とブラジルを行き来している日系人子弟を見ると、ブラジルの日系人の教育レベルは全体的に低下していると言わざるを得ない。

日系人子弟のアイデンティティに関しては、日本にいる間は、日本人になりたくてもなれないという悩みを持ち、ブラジル人及び外人として扱われる。さらに彼らの場合、ブラジルについてはほとんど知らない子も多い。多くの場合、彼らが知っているブラジルとは、日本において、家庭内で話されているポルトガル語、親が作るブラジル料理、そしてブラジルへの帰国目的といったものである。彼らは実際のブラジルを知らないので、ブラジル人としてのアイデンティティはきわめて抽象的にシンボライズされたものに過ぎない。これは、ブラジルで生まれ育った日系人が「日本人」としてのアイデンティティを持つのと相当するといえよう。彼らは今度ブラジルへ帰国したとき、ブラジルでは本来の「日本人」というレッテルの下で生活することになる。しかし、本来ブラジルで生まれ、成年まで育った日系人とは違って、日本とブラジルを行き来している日系人子弟は、ポルトガル語の能力が低いことや、ブラジルの習慣を身につけていないという欠点を感じ、ブラジル社会では親より「日本人」としてのアイデンティティが強くなる傾向が見られるのである。

[注]

- (1) 現在来日しているブラジル国籍者20万人余りのうち、大多数は日系ブラジル人が占めているといえよう。これは、1990年6月に「出入国管理及び難民認定法を一部改正する法律」が施行され、日本国籍を持たない日系二世と三世が日本で長期的(最長3年間、延長可)に滞在することが可能になったためである。日本で外国人登録をしているブラジル国籍者は、1989年には4千5百人程度であったのが、1990年には1万7千人以上に増加し、1996年には20万人以上の登録者が記録されている(法務省入国管理局登録課、1996年12月)。
- (2) 文化資本とは、広い意味での文化に関わる有形、無形の所有物の総体を指す。具体的には、家庭環境や学校教育を通して各個人のうちに蓄積されたもろもろの知識・教養・技能・趣味・感性など(身体化された文化資本)、書物・絵画・道具・機械のように、物資として所有可能な文化的財物(客体化された文化資本)、学校制度やさまざまな試験によって賦与された学歴・資格など(制度化された文化資本)、以上三種類に分けられる。ハビトゥスとは、もろもろの性向の体系として、ある階級・集団の特有の行動・知覚様式を生産する規範システム。各行為者の慣習行動は、否応なくこれによって一定の方向付けを受け規定されながら、生産されてゆくことになる。(ブルデュー, 1979=1990 [訳者まえがき])。
- (3) 外部からのレッテルを張られるカテゴリーに対し、「のれん」は自己規定のカテゴリーの意味で本稿で使っている。
- (4) 150人という数字に関しては静岡県浜松市におけるブラジルの通信教育を担当しているセリア・ナカムラ先生から得た情報である。

[参考文献]

- Bourdieu P. & Passeron, J.-C 1970 La Reproduction, Ed. de Minuit. =(1991) 宮島喬 (訳) 『再生産』 藤原書店。
- Bourdieu, P. 1979 La Distinction , Ed. de Minuit. =(1990) 石井洋二郎 (訳) 『ディスタシオンI』 藤原書店。
- 石井洋二郎(1993) 『差異と欲望』 藤原書店。
- 梶田孝道(1994) 『外国人労働者と日本』 NKHブックス。
- コガ、エウニセ A. イシカワ
- 1995 「居住の長期化とアイデンティティの変容」 研究代表者宮島喬『地域社会における外国人労働者一日・欧における受け入れの現状と課題』平成5～6年度科学研究費補助金研究成果報告書 (研究課題番号 05301018), pp. 43-52。
- 1996a 「日系ブラジル人のアイデンティティー 文化資本からみた日系人集団」 『人間文化研究年報』(お茶の水女子大学)19, pp. 151-158。
- 1996b 「日本における日系ブラジル人ネットワークの役割 - 浜松市・豊橋市の調査を中心に」 『Sociology Today』(お茶の水社会学研究会) 7, pp. 76-83。
- 1997a 「ブラジルにおける日本出稼ぎ経験者の実態 - 帰国者の事例を通して」 『人間文化研究年報』(お茶の水女子大学)20, pp. 154-162。
- 1997b 「国際労働力移動における家族関係の役割及び変容 - 来日日系ブラジル人の場合」 『Sociology Today』(お茶の水社会学研究会) 8, pp. 1-17。
- 前山隆 1982 『移民の日本回帰運動』 NHKブックス。
- 宮島喬 1994 『文化的再生産の社会学』 藤原書店。
- 日本国際協力事業団 (JICA) 1992 『日系人本邦就労実態調査報告書』
- 日本統計研究所 (法政大学)
- 1993 「日系ブラジル人就労・生活実態調査」 『統計研究参考資料』 38。
- 1994 「わが国における外国人労働者ー日系ブラジル人調査」 『研究所報』 20。
- 太田晴雄
- 1995 「日本語教育と母語教育 - 日系人の子どもの場合」 研究代表者宮島喬『地域社会における外国人労働者一日・欧における受け入れの現状と課題』平成5～6年度科学研究費補助金研究成果報告書 (研究課題番号 05301018), pp. 33-42。
- 1996 「日本語の教育と母語の教育」 宮島喬・梶田孝道編『外国人労働者から市民へ』 有斐閣、pp. 123-143。
- 辻山ゆき子(1996) 「家族の適応と葛藤ーフランスを中心に」 宮島喬・梶田孝道編『外国人労働者から市民へ』 有斐閣 pp. 83-98。
- 山中啓子/コガ エウニセ(1996) 「日系ブラジル人の日本流入の継続と移動の社会化ー移動システム論を使って」 『移住研究』 33, pp. 55-72。